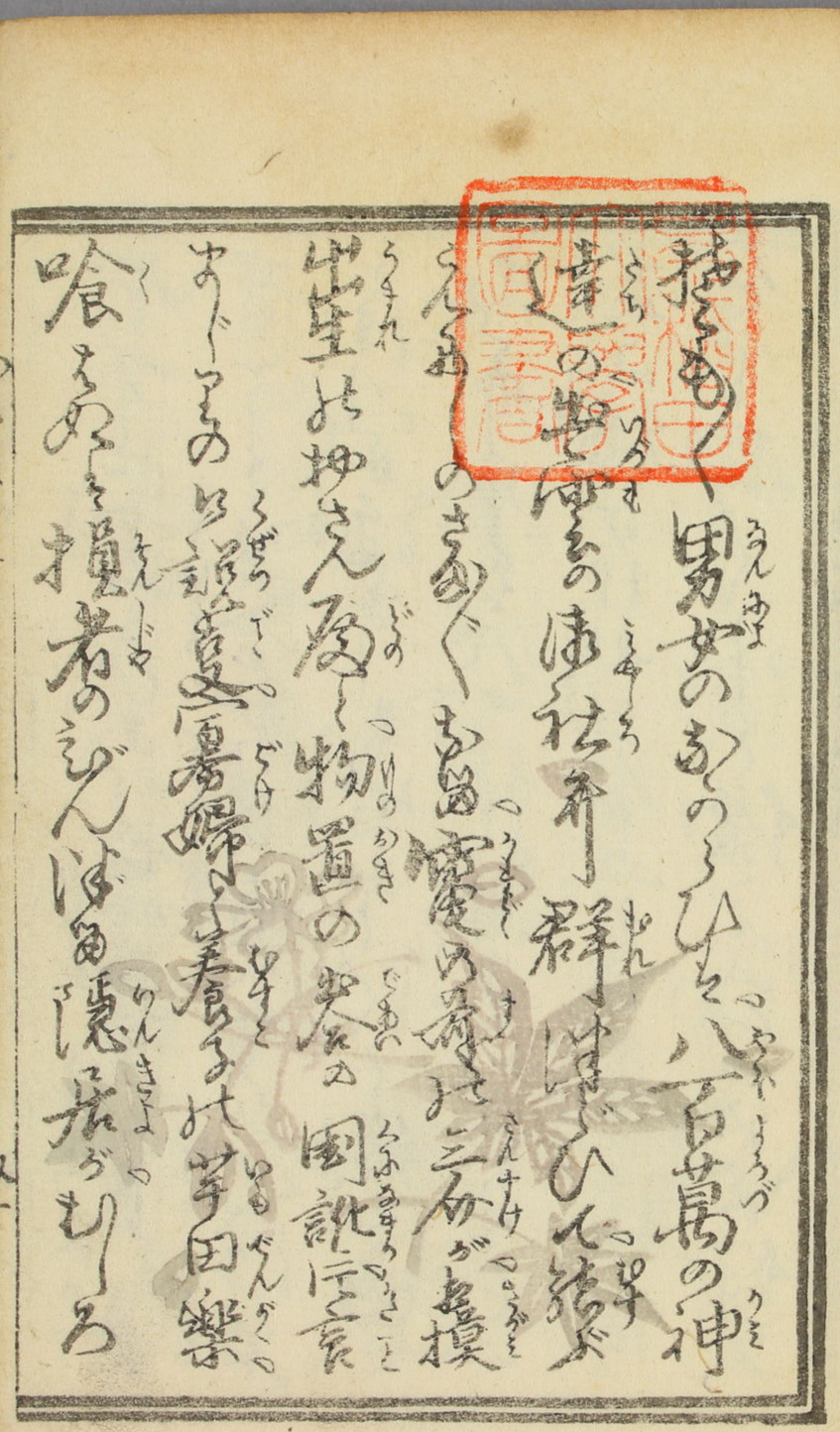
娘節用

へ13
3695
1

門 へ13
號 3695
巻 1



男女のあのくひとつ八百萬の神
達の御社弁釋はばひん徒
えんのさのくち富貴の暮より三分が長模
出生より抑さん屋しい物置の安か国訛に云
すぐさの以遠宴屋婦人養子は芋田樂
喰さあき模者のえびんぼ富憑居ぐもり

やぶりはかまびあるく帯屋の長富門の差
賓客の筆入の抄はまの壺へらくひの浮石
をはりかしをしまを潜おとしくく縁ちあど
きくべらくそひ一部は冊子のうるくの
墨ふ稿けむ小三奉丑ねうの一朝の長譚
をいく長くくしく繰くしのかく書はくん

文政拾四年辛卯孟陽

江戸　文首楼斎

斯波の家臣
假名寒金五郎

歌妓
小三
養老人龍宗
倣舊本寫意
國貞画

小三金五郎假名文章娘節用前編上巻

江戸　曲山人補綴

あつさん

あつさんは石尊のさげ物ふ紙はとび長刀八幡やぬしのそそ屋ふ
その名と止めさり。可い美場のあゝさんが活業の用となれる
神けん所代のこゝなん形波家の藩中ふ仮名屋さ今の
の進さの人る者あ。二人の男ふ行けるが見ふ文文者とのひ。
東　ぶんのぐ
男人文ぶ弟と慣ぶ。両人ぶ文武の道と考ふ文武の道と考ふ文武の道と

勤めしが只父母恋いつゝふか奥づとめの仕側ぶ章こゝの俗
宮親よりも女と人ゝまこに契ることのくるゝひが日ふ仕五
ひふ品ひつのうて。ゑのびゝの密結ふ五章いつゝ長ゝのゝ
懐妊の者こゝりゝゝふぞ世貴今ふも市ゝふ五ゝのべとゝ日
流るゝりがゝとおり人ば二人ひゝそふふゝゝひゝある夜舘を
見び生ことゝのゝゝゝを便りて。雑波とさゝてのゝりつて。彼
他世ゝとさまゝゝひゝおのいゝゝゝゝぬ日と送ぶゝの他よゝとり
て要ゝゝたゝとゝ主ゝりゝ有へおりむ仕ゝこゝとゝ所のいゝう

ふゝゝゝゝゝ弟と偽て学文級法の指南をゝゝ月日とゝゝふ
あゝりゝがゝとゝりゝその枝ふ猪ゝゝてゝれゝゝゝゝのゝ
あゝゝゝ付て繁昌ゝけゝゝゝゝゝゝ金銀の融通のゝけゝゝ
ゝゝ世ゝの金ゝ人ふ貸ゝゝどゝゝゝゝゝの利ゝゝて不足ゝゝゝゝ
ゝゝゝふ月満て妻いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ男ゝゝゝゝゝゝゝ
名ゝ金ゝ弟ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ世ゝのゝゝゝゝ妻いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つゝ。眞途の旅をおりもさぬ文を恐へこまりはてゝ妻を別れを
て今さゝふかを色こやるゝさ色とのゝどゆらんとゆさをうるけ
ゝ〜へのあく
まべ。泣と野道の送りとなりて。跡ねんごろをさもゝひろり。かゝりし
をどふ幼児を。乳ゝていそぐ。乳母とかゝ養育さを
長金を弟とをの中の。玉のゝとゝふいとゝとゝ光陰の過をかゞえ
ゝりゝふまゝ。孫敬所ふ古狹賢の六玄弟ゝて夫婦かゝを
ゝふゝゝしりのゝり。年ごゝゝの会ゝしゝゝふ星をゝゝゝゝゝ
さ。祥ゝふいのゝ色ゝゝの伝ゝのをどゝりけん妻の今年は

十歳ふまゝりんゝゝめん女ゝと儲けゝゝゝ夫婦のゝゝゝゝ
大ゝゝゝゝ。名ゝゝゝふゝゝゝゝゝ

なく。妻いつまと捨て亡夫の救ひ入る男の高恋ふるのげくより外なりしと近所の者ふいとうしまとまづ込戦い乱れん。

ものとまりうるー物のうちふ。さあうーおりひつぐくまづ食ー

さくしふ男の手一ツりでしに二人のふとびそでんやうもるう

つまー母ふ。と鬼とも蛇ともるる。義へるどふと捨ん今と名

ふまふふくーさん。一日くとくーけり。さると仮名家文之

恋いつと文吹くものが分ふ引くくくの捨て死ぐく。今ふ自

由ふくくしん放当文のふと釈ふ。ふりふけん肩て

ふべたの秋の手ゆまとこいかうく。ありあやせんと人びふたの

文といひ入人。悪とりくひうけ。名をお兎とあげけまく。

くくく。武許の金とい主湯ふあり。帰る娘とそづくこの人と情

ある深節ふ心主来いくくよくとびおそあげ行まを家ふう

く憑こと見てり。後ぬまる見て。金をかくお稽ふ深ーさる

久

家文里ふつ民。あぢんるきせとおくりけり。ことびまき吾妻

ふる。仮名家が家ふ久文之恋ふ不義ふん家出せーくべ。

月の文字之進ん怒ーまくあ。悔とのくとも世間の

かりりく上への供え。親の名と出仕不孝の罪うち捨てもか
くなるべくこと。当の孝さを君へ進ー。文之恵と初めの孝
文化帝ふ帝督とあづり。嫁と迎へて見ふ要食せその男へ
隠居ー名と白髪とあくまんくうち。文化帝ー丈婦の中
ふ。一人の女児を儲けり見ふつけても文之進い文之恵のと
ようふ。行ふ子ども家ー。おりひ出へてのうおさふ。
今い花落ふ住るれ。男ふ拾て不見ふくうと人の風儀。
葉ドの物も寄すまりて。ぬくくい文之恵ガふと。文

ふ要食せ帝とあづくべ奥さとづも級だとおふひおうけり

第一回

さるべ月日ふ実ちるるくて文之恵ガ二ふ金ふ帝い今年十
七才ふ亀い十八の春ときりしガ二人ともふ天性の美男美
女ふくて華洛廣ーこの人どもこびちとる容顔い稀と
楼の花魁ろくべおくくべきぬ風情ふり文之恵ひこのし
ごろ郷とくるも遠き勤ふ世とあくるそのうちも二人金と
ふとまくうけ行ふ見ふ文化帝のうえふも十年ふ過ー

大和堂圖

こう藻くらの家をぬけ出て又のこころ人便さえ。ゐ〜れば。いと
どもうしく。ゐを捨て。ゐる親の恩報じがたしとて。ちと〜く
おり人月のくら考へ。ゐんなまびを家の程をやぐりつ。妻と不
義して。知人無せしを。今ゐ俺の九のひるのびふさびを家
へ立ゐる。と申ゐんとゐくさと。彼是おりひまいさてゐぞ。
ちゐくより金ゐ帝ゐ。文金ゐ武術を教へしふりしよりさぐ
ゐ。九うまるを申ゐ。一と笑て家と云る。文武の九ふ長さをば。
武術申ゐく上達して今ゐ金ゐ帝ゐ。武士の乃ら〜〜ぎ。

猶ふ和歌連俳茶の湯挿花のさびひまで人ゐ〜〜より
ぐ。侍まさる。よゐ九壮上とゐりふりふり。お龍ゆまさ世ふゐづば
き。祭門のうまれゐて。文よりこゐまるゐらふ乃ゐさゐ〜ゐ
物さち縫針の技ゐふまさぐ。琴三味せんの調べさえ〜〜
うゐく〜ゐふまるを。女ゐの乃ふ〜〜んその生ゐるゐ。その性
く。人ゆう〜ゐゐむぐりゐ。生ゐ。文之ゐい行とぞ〜〜ん乃ゐの
ち。又ふ動尚ゐびて。こぐゐゆの新をう人ゐ生まゐ。と人を憑く
〜〜〜

順の文之丞の方のいろ〳〵ろ〳〵家出し人今い死活を知
為ふ文學武藝の師範たる不自由なく〳〵けと人孫
ちで出来ーと生つるがいろるさ為ふ生ゝ立やるねまでト
おりのとりろ〳〵人づてに文之丞よりつゞび之とりひ入けまゞ
白鷺いうまつさひとうとうるろ〳〵ねどのつ〳〵さん金差へ勘当と
被為せ一分とうまさろの母るまるまるのされゞそのうち
貴尾とうんつろひ君へねろひて出入とさせん文通のろい苦
ろ〳〵ゞ又孫の金太郎の罪を九分の為さいひふ〳〵金太郎

男子のろりまゞ迎ひとつろいーこるろ又引去りのりくい仮名家
の家名とお續さまるれどふ支度とその人待べと返ろ
ふ委細と望よりも文之丞いたひふろろゞ分の出入い
かるいゞとも將とお家へつろいまろのうえ為九ろうり
と金太郎と迎くまるさ張ろのるくいーくろう日ふろ
ゞ迎ひの来るとまちに張ろ〳〵表へくるゞしと望人金太郎
い今さ〳〵ふ兄ひげるろ〳〵お家を継い分のおまうトのひ
ろ〳〵一人の親とのとーおきそのうえみどものはよゞ行ま文

ぐひふ丈様でと。箱ふたをあけひ。お亀ふも。ちとんとのこころ
憂若いまぐ花いろいさるでと。何うふこころあくそとものくうち
とけてふくうくうねゝ中ゐるめとうち捨て。何ことあとさまう
まうぐまるがこそぐちの心みい。南蛮恋とるゆ。理りあり。お亀ゆ
このゆ。ぱーより。公細さの素ゝどこあせんかく。あとおりゝ
うち。孫ゝくより金六帛と。近への人の看しうい。今いうとと
こゆうけうと。人月の関のこのひ法ふさぐい女ふのたゆぐう
いとでふ。何ゆゆ。ぱ。ふ屋用とまり。夜引のたうち

昨ゝ。ゆこぐのひまゆ。ゆくだうう。ちうう。陸ふ川ありゝふまの
ちうる屋用のこと。打ゝくゝたこの。金六帛一。おうあけゝ
ぐうぐ。ぱ川だうり乳色ゲこるいのゝトのこと。ふゆふの月どうひらゆ
ハイいうゝのこと。業ゝますとこうぐそくゝ。乳ゲうふこの人ひ。
そ乳痛ゲいうゝますゝ。ちうゝとおとゝ。金六帛いうゝ。あゝうこ今後東の
年ふ。ゆゝ。ちのうゝゲ。別ゆ。ゆくゆのぐうゝ。そゆとんゝふくうのの
ぐううゝマアゝ。何いゆゆかくゆ。ゝくゝいゆ。ゆでふゝうのぐ。こんるゆふ
ふ。ふゆこうゝ。引ゝぐゝいふの。ゆのぐ。せゝうこのゝ。ゝちのこと。ゝ

たゞあるのみ。「ゴウ」
あるいそうしく。あさまをあさくさくろひ。
あるめつよく。既痛がまるるるく。るんぞ業ぐもやらうう。「ハイ」あり
ぐくんぐさうます。もんまう乳ゲふさの冬頭ゲおりくてるりま
せんくく。今ゐぐく実母敬とのくまりョ「そうう。ものまりつまる
ぬよ。今月くるのて。るんとうの病れ乳ゲ出るとうりいく。今月ハ
ちゆうど天気いよく。茎長でも行くうんまどりて「いくうさくくの
茎長ゆうんさくいどぐうりません。「ハテこまつくあどりくうんまど
つくの。周易うくの陽寛くの周ゐ命宛ゐ大ひゆうゐんも。

そをとふ東くくのものくて来てある路考の門弟の路之助ゲ又
形代のものうくと。絳壺でうくこの人三弦の手ゲあうくのうん
くもまくとふ形ゲョ「さゆうでくこいまますと子。アハひつそゆまゐの
くと出一所ゲ浪の死へまおりまくくと死演芸長でうんまくと
絳刑のよい。紀伊周屋いどうりくまくと子。「孫之助ゲ今わ
東船。敏つくの。まゆまくく絳ぢんゲよくくの人。去年の表向所
の芸長で。刈。萱の狂ゐと長ゐど。迫年ゐれくゐ大。あゐりゐそ
ゐくくるんゐゆ刈りつゲけゐ。所ゆやゐ死ゆ紀のくくとゐくゐちゆん

ふ女ふ供が。ゑのなまるとと上ゞさまぢりのそうの評判／
そのゑのこの今い紙の間屋ふゆ。まこのこふ方ゞまのこ東へおく
こうまとゑ／こゝゃアでんるゞごろうまをう／「紙の出やうのゑ
とのころやアどこの人ゞ／「どこのお人ゞは存じてあうるゞこ／月
ほこうゝゑんまゞこまるゑやふ紙の間屋と／ッふこよりくとの
ゑ宮見と学文のけいこふおゑるゞさるこるゞさんふ所ふ
こうゝのこたおゑるゞこのまず上／「そんのこうこのこりゝ解せゝ
「こゝりませんゝゑるゞこのこゝこうこのこうこ
「そのふとのこうこ

おもつこゝ。あのゝゞ顔の稲おゑ。こうゝかげんふおひゝるゞのゞ／
アレゑんこうゞごろうまず上ゞこまゞこゝ／私いのちゞのくらく ふ
ゑ／ゞまゞこいろくおるゞを茶ゞまゞ／ゞまゞと。絢ゞいのちゞのふるうまず
上／「そんのこうこのこうゝくゞゑゝ。戯絵のゑうゞんゞこうゑんふ
あんまり茶ゞゑさん多。近ひと一処ふあこの和孫くこうゝ
こゝこゝ行くゞゑ落つのこゝ早速ふゑゝゝとゞこのこゝ
ちつこのうちゞ約くゑるゞゑ。来ゑゞこうゝ親父ゞ女ゝ
あのこゝゞ夫婦ゑまこるとかゝゑゝの量見ゑるまゞと今まゞこうゝ

ふ。親の目と云のんざう。なまあいさつもあるまいさつとぞあるの量つ人一ぢやりおいしふをざうの。侍ふよとまぶ侍どれるゝ縁つく其ざうるりと。そまいとテ侍まぶ身あれるさもう東へ行ゝ。いやふるつこ間ふんざらう。のふあいの考「いの人るんのいやでざうまもう。ふ中ものいとざうう。さとざのやうるどころでもあるこぶ時でらざさのまあ。私いうまとちうどさのまず。あるこい来へお出あぞりこさ。ぶのまの女中い上人見でまとふ。家れざとトールまふ。私のやうの合りのいとてもモウ。お捨るさるい考とそうりますりの者ゝのあ人考へまずと寝ても夜の目もあひませば。その人実の父さんいお教さ入ぬまうちふ二年浪ふお果あさ見浪ふ独うい梅さんひとり。里ふ行てお出るのさまとがいつぞやあ見居のり。若あひ便ふるうさうるゝまとうり。ゝてまあうと存ます。ふそのかひもあゝ。里親ふざあさまん身と河竹ふあ考あるのさりしとのあとも名今い杖ふまゝらふもの力ふ見のい。おとうさんさうり。来と浦ふうあるこふまんぞおりひかり。るの

こん夜のおつゆは私がそこの者ふるりまりさと
そこなのどくばん
金太郎はそのとうりを「うんのとうりなる。そんなふまのさえ
おのれしやうつるるのをを」
どるうゝこれがさぐるわどあえんふまやくとうを帰さ金
ものをうとをたいとうがそのものとものを人間の老かふ
えさざあるのいのが世のるゝひ命だりい神仏のものつふも
ゆうぬのいるが完生をるの宿世それとよゝ乳ふしん
も約ふもそぬとをやアねゝ又ととくとゝふ遠くへと
つそ約がとおり人ふの糸とものりそもとるとぜん解ぐゝ

ねばるゝねゝさうりん階いアどうさるぐ　そりやアモウ
あるのがおつをゝゝとも海より山里の涙のおこう
さんのおつゝるとをもゝとをもゝとうにどうまをんがこの友だゞ
つをんそもきます。さて人特彼のおゆるをとうけをとも。あ
るのことのけん余の人ふ添ますとうにどうまをん。あるのこゝ
東へおくどうあもゝて。問ふ伝もどうまをんとうをとゝ
いそのとをいとそもまをいとうまをん死ぬる分でおどうか
ます「馬鹿なとをいとるる。そをとをいうんの線乳とうふりの

死くるまで人々の心も若勇をまるるものもひとすじに涙ぐましいと
おもへばこそいろ〳〵ふ義をとりむすびあひ。そんぶつこうしゅ
とこいらうしへくまでのうち手柄しん。便りとまるのとなんく
あるのコサあるのあるぜそんぶふ法るまるる。然うるんぞのすう
ふうとまで一生あらぬとのくとあやアあ。ちいと気とあり
うりもちるト。あるぶそんるふとまうけん。
さ〳〵おつーやつてくぐさうれど。行かのくるりまるる
考へてうんまいうんまずれど。あきりふがそくるり

あるぶお宿ふお出まぶまてうちのつて死ぬまるのうく成
まうるト。今天〳〵のひざふとのつて。今一生おめまでアがのようといるんぞと
のんと死く〳〵と沢もるのいその縁云でアよくりものとへりのそうんる
うんるとをうんと年寄めくぐ今世の中ぶ静ぐうようけ是
昔の礼世の時ぐうんるるんぶ出のくのるうるちようつるる者
ぐも。武士の種ぐう〳〵軍のとうくうん是非出るのけつまやアるく
性いようう出まぶ歌のうまとうるやくとうちの貴とぐく
ぐう二つふ一つ命ぐけ犯を捨子を捨て。戦場へ出るの武士ふ

るゝひよむしと今とくらべてこんなまことに楽みなこの世の中
そんな危い行くゑもなくなる武士の身ふりてへかせえどやそのけ
もど実に今の極楽世界さらの居住を考へるとこの年や
大年遠ざかるにも昔ふまたるかどのこともわへがそこがやうこと
自己稽古で十分でもふ見ふ者へ人情のあるうめへ
さのそれぞれかのぐんとめたるくおりの時の弟を待ち
上線乳を出さそのあとでいい後悔してもまつわへ
ぶとたくさん拝がいしと

見物さるへ見物さるべちよろと入らのまのまとりのみ金
の弟いヨイ〳〵とあのあの新参を出ぬ出ぬ又又恋八二間の
ぐちふ煙草ふくもくーと又上とまるる金ふ弟いたとうふ又の
側へふかこるヲ今あるう扱モウ後ろへやるのも間
のまとび旅の調度を落ちく用意さるぶよのでやそまふ
けてくどくとのひさろまてまるでもるみまとど物のいつぶの
谷へ投其生きをこんて女婿
夜の船のみ多ふ生きるの親の居者歌でさ入そのやうるを

文之丞

金五郎

況人間の孝子ふるまひとなる事は敢て高き僧
侶伸とすべき稲州源どる小さ事人のハ今ドてなりん
やそもそも十八の夏ハ要ドるれどのてこれるのがかうの孝子の
異なるのなどど人なるより文武の道ものさぐまさこの人た
ハるのゞマアどのやうな人中へ出ても生んざゝ所うくゆるの
ハ人ものゞ貴ふるとう蕊ふ漫ドて多くの人と眼ヤふつん
らざてい多ゝねども又ハ四ハ祖父さ多と大るふるのコとを
ふろりて孝行しんなる三ハ夫ハ父ハ帝ハ書父さの道

そもそ多るあるのハどと考るさ血さもちの教又ハ名ぞのどん
とも不ハふそむうんとるまさ孝行せるやうゝねどもさ源
ゝハ繁華のち体ハ多人ハが都と遠ふるそよく風俗をのこ
ハよ伴多の付ふひそのるものハ門ハ不ようのハのひさるの
ねと物ハ百うちどハて花ふさそのまハ月ふうるさん女
帝買るども三度ハ一度ハたどさるのさまるけつアやアハどのハさ
さりるのゞゝ傾城傾国の聲ハもあまどがるゝ花ちくさまゝ
ねどうハふとろるどこゞちゃるゝねどそれ孝ふ伝を励まどその

男の素ゆあうねどごろく不酒色い深り雲さく抜ーとり
名將雲方士も色不迷ひ酒ゐ溺まえ。大切の男とゆろぶすさゐ
ゐ由まつゐこ母家ちの居いふくくまつ元ぶつ元ゐとこゑ常
云の恥をのるみで理ぶゐ見ぬとのゆ通りゑゐの例いらのおとぶ
居所のうりとりひゐぶう。出分別ゐ分うう親と捨古ひとん
ゐ見家出ゐーとゐぶーぶうちい任居ゆさぶゐ元ーー
が。親の男ぶい不孝ゐゐでゆふくーー罰ゐうことのいらなよ
とゐ行ひとうめくう。仕合と不自由ゐく暑さ。ゆさゐ雑

我ゆ世ぶ人ゐのうくーゆ世をあくる。今とのくくーも浪くの目ゐび
者の屋こいゐのけ見ぶ不孝のの罪ゐりやどのゆうゆ今ーく
悔ゆゆあくいかくぶ世とのの居猛ゐとく無へぶ。女色ぶのの
外ゆーとこゆい遠ざゐうゆゆ今度ぶちゐうゐ外
家へりこいゐ見ぶ世ぶ居へつゐ母ことゆいとゆびくく。我男
のようこびこのうくゐ。又ゆ亀いちのゐの時ようぶちゆゆの
ゐ家と濃ゐうゐの娶合ぶ夫婦ゆ元ゐとゆりくぶの居さ
見ゆどゆ。ゆ家へ母ゐびゆのうぶ。ゐ浪ゆゆ氏

すべて
素性のひとのひ者の多き人のやうの振の妻あるのうちの雅ふ
あるものの中でいろ〳〵とさせることの人中でいろ〳〵
さうへあるあ婚元とのを思ひ〳〵ぶつとたちこうふ
このことのとをもるけまびかるく〳〵ことをもふ今の教訓
つまとをいるく〳〵ねごやトつぶの身のことすとをのまふの
ものとりと金天弟つぶさふ詩ふ拍ふさあり〳〵湖
とうろとのるくらぶ月ふうあんつをのことまのと
きれ教訓きうとと月分ふとうる人きて人ありぐるふどぐり出ます

月とりあるるつるしるの出どころのあり〳〵出ますけいい
ちうるさ
大春二つとたげとます。あるるさもだのぶんお身のうへ言大
世の
切ふれ書出るるさ出おさとやるふおるとしるるさんくぐさり
キートあるるるる「イヤ文出かくぐらあるあるそちとあるド
やうふちひさいとんくく芸ふそぐちんぐ弟同指ふくくし
うくく今つちるるも加るく〳〵ろぐと出も宮ます紹来多
むんべう
云分別の出ぬやうふまくいと出とのくさぐくうのト稗ものふ
いも加とつとけさとぐとるれふ今天弟いい父のおと遠とえ

あるが部屋へ入り。翌日出立のことを申しつけ
もぐふ旅の準備と落ち合のくとの人々胸とをとをう
ぶとつうひるぐ〳〵あるめの部屋へとのと来り「さうぐあ亀
ちうとい気色がたつう「ハイるんざうでうもあこざれど
けれどやうぢり乳痛がいく〳〵しうすアノあるさいざうでもあ
この部おとあぞいたうでどざりまする「さうさもう迎ぐ
来てあるう〳〵。ざうものぞさもとも乳のさてもどざる〳〵あるん
の乳をうるのも今夜うぎうもあるうまるとねうんをうあふ。
能うんて迎ふとおりうて来とよトつ〳〵ひるぐ〳〵乳をうん食べ
あるのいたづらげふかふとあるめ「まうさそんな虚ざうう
そまたいろんの乳やすめてはどざりまもう「さうさいづまあの
らのふとい虚さのふどうぐもう内日〳〵乗れんのざう〳〵。
ろんとうあやアろのんたづざ。さうれおとうさんぐいひなまうと
ことおめんも大くさんやさうぐあの〳〵ぐ行さうの路ぞんあう
めふ才ふとうんやうてこの家を面づっとあうまるうこのふ。
りうの聟ぐ色男ろう前つうりうまうりうんぞあい〳〵のまう

なりのいろいろもんだいでつぎさらう「なんのマアなりつこい
なの夢ふもそんなこころのねるまもせんさと人業平さんがきもと
うろうしまるりまんもつきしいあるさふこんろ人るこころの瓦
の垢ゐどもござりませんヨ「いのかげんるるとしのこんろ人る
こころの富士のこのゐどまるざらう「モウ〜あるさらるぜその
まうふつきしがゆんをあるこがひあをげます人「うと
ぐつきやプるのへけまど虚らいのひやうざろ。そまど信
実まこるるかるべん狸亀とおさるめへで。仮りとまるのを信ん

わるよト脊とさまきまびあるのいうまるく「つきしいがの
ゆふふ的ん行んをる亀でござりまんろ。でのぞきろうとお仮りを
早くるすのんくござりまり。トこがひふつんね名殊のるこ
ざいくかいいもまざ考ね。陶のかこんのるくもあるあい
金る弟がち又度さる。ろ又ふ拍りのるどえそう人るうもう
用意とぐくさてのゆ。うばいざ出て手とさぐめくと今こるう
いさまてがふも洛ふ公の殊まども。冷ろとるのけるとべ一弟成
さりるるり。又とあるのふつろまとつげ。正ひの者とるう

芸ふかづよくも旅之と。今ぶ名殊こと文之恋あるを芸
ふ門迄まで。あるう出つ金五郎の義うんあるうこんあく
まで。あるこまつえう人ふ別はの涙こぼひふ物の憂也為ふ
かくまで姿いつえんたりぬ

ふさん假名文章娘節用前編上終

額小三金五郎假名文章娘節用前編中

江戸　曲山人補綴

第二回

在蔵復ふ。お亀い金五郎が強食べこぶりし後いいこぶも
むこぶまたこぶう〜浮之吉もあく。今日や後のあるうやせん。
あすや寺伝あんうこあぶふ色目と拾とりかぶ之一日く
こうこんいうちうあくも寺年ひまりも色て弥生のまふ旅
おけり。さまどのうある吉ふやあり申ん金五郎の方とうこ吉伝

の矢さん家ねびひとりゆふ。あるいおりひいやまつんでりのふ俵
び孫金のお雪この今。娘ありん。ゆりくハ金ハ弟ハ娶合
さてる物来るの上。きいん猶さう猫つぐさこんえんびんう
うこさうの飛紙このえこふ行ーふのおううさよ猫ハ妹
彼のかこひ。せぬ中ゆるびるりくふいうの世ふうの添虎人
なつびんこのえ今さこうこちうの男わるいこうくうく今い
日ごうのこのえこの平蜜さん泣てこんうこおりん千とふ猫
こうくあうふもあ豆ぬせうゆさと文文こ恐ふのかこ豆び

ひとうんどのこうーぐ只そのゆのこおりんりのうこうくこ家
やこ猫の鶏ゆゆこの食ゆさんうりくこさこまぐうこ所ぬこど元
より猫むんゆけ豆びあぐんゆきせとうこかこち一日二日と
あくこども。夜の月ゆあんさん妻ゆゆ仏さんこうこ者人
てこうこびよりくく幸ゆえうまうれゆえ祝ゆんあくこ猫ゆんりう
まこうこうさんゆえ冠の周果こうの乳ひゆかるのんねび生ゆうく
へてゆ楽かくびんのつそ測川へ牙とえのめて果ゆんこうこ豆は
ゆくめこと嘉ゆこうゆこうこ変ゆんぐるこ乳ゆうくふゆこ

寄ごろ閨の戸とふけゆく夜半の風ばかりぞかすかにとうちさしたれあのいとうどこゝろぶかおどろかさまとそうまあぐりそろうこゝろとあけうかくどんもあゝねばさそいつぶゐのまちよひよ風のこゝろとりやそ寄ゝたその人の来るひとやかりひしゝもゐあ海猫あさゆきこゝろかうかとりぶ家のかどとかゝりこんまさうち附さそふふさびこゝびあるのゝこゝろのこゝの耳ふ入こそいびうゝくりやこまぐひて出てくれば軒さへもゐうち附せべまさよび声のさるゐゐふあるのゝ義たうくうこゝろそのまどひさへ解けばこゝ

ぶこゝぶまこて寄さり所さりこゝるぐゝくゝ涙ねべ岩びゐゐゝゝめ死ねビと父母の涙のゝるゝん。ゝそを動くゝと寝乱のよりるゐたちよひふひうさまこて死さる岩人悟ふまこそゝしとり女子ひ雑ゐゝん去ゝねゐうん。ト裏にはりぬけ出ていびくゝとも会いそゐ乱ぬ。その門のまきあるのの所ざるどゝんつけゝ文之恋あ門の男女の縁ゐこそ処代処とさるせどゐ。その乱方ゐれざりけまべ。文ゝ恋いつりゞ岩ふ月ごろより金ゐ命ゐ丈のゐくゝりひおのゐまこゝびひゐゐゝゝぬ中ゐりしとりつゞ恋ゝち

主一その日よりさぶらうくとゑて東の方のこうち縁ゆ。
縁ゆ水添をねるゆと。ひまうの四月ふ紙をゆ。殺るゆ
ちくうるさまそのい川へ流めんとうつのごくふ
いひけるがさそいへ水やるうさうりんと猶へと出ー水道落
るくるねさびけまどその死殺さえ去まされい今い文を恋
も定業るんとやうやくまさめ赤出せり月と忘月と
ゑん七日くの病ひさむくひもわんごろふ涙るぐうふいく
るこの文を思いるゆとうけく快ふゑさめ。法ちこの金ゑ
帝ゑ天人とやして新くせりさ且び又金ゑ帝ゆ年赤の紙
又文を帝の赤ふ。ちうー
ゆ赤ふ養ゑふひ。ちうひさあお
ゆ赤ふて容貌のうゑりさ根のあるふ絵るさーか今さくに
陰方ゑく。文の教へふゑさがひて養ゑ母ふ孝をほくぐに
うちも弱ふのとせー。おゑのゑのゑ乳ふかゑり去い女ゑ絵
ゆ
来ーたりゑ且ゑこの地ふ落ゑ来ーゑ後りとゑりて体ゆ文
んと思ひーさゆくひちがひ。お雲るのふまどゑゑさこの文ふかゑゑの
ゑとうちゆけて逆ゑーとゆのひがくく。猶ふ実ゑ文ゑゑ来がお

うあい事ふかきものいやーけ月ぶ。年寄の娶あるりかぐーとりさるこゝのかゝこれどもひ食ぐ物くいたくもおろあと海のこるこゝ一旦仮事ありこと思かる新世界おのひこと思と云遣らんもさまちがあて又遠ざくりあるこるまゆこりをまるるのくいかりひのこゝとこいやりんたり理事伝せあこそこぐひのこゝあいつくりまるこゝもあんこあくゝあいたの今ああ愛数つたてあくゝぬあると今さゝ人年の人の身沢のれかあるまこゝこゝいこゝちこゝこるのこと日こゝ相のこゝゝめ

りゝかるこゝろふ実又のこゝろゝりぐーのるよりあるこゝ年出ーりあ有るこゝこのひこゝけ金ぶ年い後くこゝ人々こるくゝ事中のこゝこゝしるひーゝ公れかのこゝこ相つぶこゝこけまるまゝこまゝひーぶこまゝぐ男のこゝるこゝぐりゝくゝむ気走ーつゝぐーおゝゝ縁ゝるこゝむしこゝゝめこいゝこゝあけゝやゝあの公かゝり我のこゝふゝーゝ公ひゝるゝもゝくゝれこ男こゝらくゝ形出せーあいゝゝぐこゝるゝ又いせまれこゝくゝそれこゝこゝこゝふ流ゝ入水るぐゝゝーゝゝ公ひこゝりゝ公に

面白さうなり。是より後い金子帯もあるめど死せしこころよ
めつ。家の振舞富の姿も十人花ふいさとぐまこさまごつん
かんこころもるるぬ世界ふこの赤元ともるるぬ。ろくぬ
月と色とこうち。夏去り秋も秋月の中旬ふいこまと異
さのさらぬ。あ日金子帯い。酔狂とのの友達ふこそのれん。
大磯の桃鶴とうん物せんと。うち連てこそぐまより駕へ
うまこの茶や吉田屋へ色元酒宴とまろうけ 歌枕拳
ひるんとれまれんぐめこうろん大こさるぐ こと[illegible]

おくさん〳〵コヤ　おくさがうちよのとこのちどのうへ
おくさ「アレいやぢョトくおくさとそんなふしぎ物がこさるか子
まるひのん「ヨイさぢつるゆかんゆんりそおくさとよゆッョウ　おくさ
いるぢ〳〵ちよつとしろとひのておくさ学れ飛切大様上
せり賣卸仕らぢーちのん声ることつくふう〳〵「ヤー〳〵おくさ業の
ひるさ様〳〵「菊とうまりとよりもけのえうの袖ぢかく
るらん「まるひまうするハエへら〳〵エへン。エへン。エへエへエへン
エへらら〳〵目八「るんぢ〳〵。コレどよおさのぢそそ小間物
つんせと出ーちやゞ美平ぢ毛「るぢ〳〵。ちりやア声及ぢ「エへン。
エへンヘンッ。るんのこうこと「ハテやゞ行ることと性ものんなる。よく考ぢ
らうぢろう。そそのいち嬢ぢ二十ろうサの辞在「おさやアぢまる
アハ〳〵〳〵「モシ見物ぢるてぢぢ毛ん。まてふぢうまどよ
まてふ実ふ物〳〵物でぢ毛ん「るんぢやろまのの物のん
のぢ「イエサおるのぢぢまてふぢうまの「おさぢでハ〳〵。ぢ女が脇
るぢう〳〵やまんいん「いるるちてまは接接ヲホ〳〵ッ。エモシお
ゆくさんいお見ぢ二ッあつてようくうんとえまうすう子。実ふう〳〵馬ぢ

こアらのこうこ酔「ハ〜〜狐のこのこうこ」おのあてう屋ケの目ガ可ざ
つけの。その男ごぶまあろさ〜〜ハ黒ふ紙ごのハ「さやうさるメモシ上
ル。ようごでううド生」顔の九ともあんぞの門合ろんごのこのあく
綱渕孫の結メの再来モシ扇鼻助ブ撫のこうごろと毛の
人眉毛ガあろつくりとろのくドのやうに。鼻い狐くでのわ今ガ
赤くあくまたにハ鉄湯のざろにぶ。流ー男の給金ガ
安いくて墨い一向ふこぶれあげび白ひのあきとのんうこと
ア。ろげかりいぶ愛敬のねメ女孫のろさそメろ仏面ちぐごで
月八「ろろ〜〜ぞさろい狐の遺恨ガあって。ある紙の狐ろ
しとさるのぶ。陳りの宝とかぞ人ろやうふ。人の病気と気病ふ
病ひとハとうの不どおめ中苦労性ぶぞ。てろく男のの為
ハこそメもまるのでうるせんぞ。ヲホンく「シ」あろうぞろりくごぶる
そのぶ。コウ戯後いおどけぶ見不幕間とさ〜けやろメの。
金ろうけの鉛ガあるぞ。九月ふろると「ろのぞく〜「ろく考へて
つんさろ〜〜宮白ろのひにめくと云八「ハテナ宮田でゆろるとの今ろノ

「ヘン押の縁へ神陽の絵ありぐるぐるよ」「ヤア神陽のまつたる
めつたち生姜。ヤの爺ゝのことぬるえやアがる。コレえんえん雑
悲こ何てこうくいつてゆ。是でも女ア惜ぐるまつて男ぐよ」「えの
かへアとかいいぐゝまてことゆあるあ人えの顔だやア」「えとゆあゝ顔
ふやまちまいぬ涙ふやアまとぬと」「ヲウさらさひとちの月ふ惜る
ふゝゝ」「ヲヤ月八さん今日いまエ不用ぼうえ」「十二サイ
ちん多理ゆ悲ゆ無へ弥人田丈肚人と語い会意ぐ」「十二あるぐ
田丈野人ゆう。是ゆい牛房ゆ」「ゆ不モシ人」

さんとおつまえの牛ぐ子ちよのとゝツりゲ天皇秋の国のとゝぐ
ーまるぐう「こりやアーのお押ぐ」「ナアル。えとゆあるぐ言ゆあるぐ
モシ是ゆ実ゆ物ことのゝてちぐぐ人ますーのゝ不歴いモシ千年
魚のかゝのゝのゝてらのぐろまを引迎でえりまるぐ。けゝ突牛ーの
美衣雀とゝのゝて。ぐゝはまゆ会のお蔵さ子。えの雲良とゝのゝた。
天人ゝ羽衣とうぐゝ。無天さゆゝ行紐と羅ー拙者ぐお宿のゝの
神ゆ。魚とまえのてゆげ出ゝんぐゝ「ヘン」がうぐふゝの神とあぐ
めらの「月八」「大ぐゝふゝ。ヒてとまぐらの天重ゝえもゝのとゝ和へさげて

墨のト。そとゝゝモシ長れる今ふモウまあ人真名鶴さんがめくり手
すゝくよくお辞儀をあ世人実ふびつくりあのさちとねずこちこ
子紙のえどゝゝ。手の方らい鶴よそとうぞう者長
とやはさとそのぞうふい油断とさるる。ふそ人やうのゝぶちの
めせ。だくこいつはとらい船のうまはこふそやされとん多封帯
にるふるゝゝはさア。ハテどんどどん。だんどどんッ。せう絵のさ
ゞえどむアハハゝゝハ酔狂「ヨやうちやくえべるぞ。そん多ま
だのうと天井の煤ぶ神多箱とうん魚の板ぶをどり出した

らう「遠へごせせん。酒呑徒にぶをありをのうて。法あの引物と
引出さと。吸物椀の出者ぶつくとて。現ぶこのくりい
かゝやせう。そんぶ化物屋ーえのやうぶ。アゝゝゝ上船ちどけの
のけて。モシ婆とさとはば新ちやアねえ正真正銘本家元祖
まつ婆。外八文字でちとうのりゝ。アゝゝあ挑灯がそれ出
世人まん「ちんふのゝ金さんおめくよく用利をしたり世船
でそれふへゝゝ今夜の花ふ多のさるぶのく「ちげ人ねえるんるゝあ
生人とのあのふたるゝトそのふち十年やのうえ和一文銭十さの悪い物遠む
ゝりつまたもりゝ世んとあとこるを金ぶのいあとをさるえん

ことばのふるぎや　四くさのもれぬ　あるあの姿おせうと　ぴりやそとろと　はぐ〜つんとぶ　雪

つまのせるみどごとやく〜ぶ　遠のやうあるとろ　月ゆとにはりと　憂

致ある　見くるちのよく似ことば　自ことごろ　ひこぶ　多

の迷ひろ　辞　ろる　由名ろと　名迷　こんとと　元　鍋　ろ　元　とこんとる

封帯　間　辞　狂　由　金　あるのろと　辞　「コウ金さん　お支　いらのどろ　ぶどく

物業　ぶ　ろ　ろ　ぶ　ろ　ぶ　ぶ　ぶ

雛編笥の裏様つれ。ひとえものゝふついさけのあやぎん。高の後
天ふひのごろふくつまんの振あゝせの巻とゞゝ。るく むらびと
巣ごゝと行てつまとゝろ
りゝ。おやたゝるんしゝ。るゝ。紙てあておこんるんぜぬゝせア
月とおさるゝ。るんゝト。月のさるゝ。「ヲヤ あゝゝんゝろの
ろふヤア来るすゝさろるゝ。来ると。祭びろふちろゝと人
でもとゝろゝるさ。ぶゝて。ゝゝぬけふ紙さ。ちやア出ぶ初花
るゝゝ。「ヲヤくゝゝやでおたよ。「さゝぶゝらろ子ゝゝ。ゝゝの

せうるゝへろうんゝ。可愛ゝゝまるゝへのゝあゝりゝ。「アレ
さゝゝ。ゝ長ア。おゝりゝ。せん。おゝ。乳ふさゝろゝゝ。ゝゝ。るんゝト。
るけて出ゝ。ゝ。ゝ。

ゑ
ゑ
ゑ

遍ぐ。ハ人お出るんさとうちやアおざりいさ。「そりやアこんな
こうちそのハと二河の流れ二樹の落花生の縁ダあるぜこそ。
かうーてゴザ〜まるとのハ。おめ人さうのハとうるゝこうとゝも
根ゴだり通ハ。ゴザ。の時分ハ突出ーちやア根こぞよ」「ゴハ
ちてこアめ」と突出ーいちゝ。それこそ得ダあさりイせう」「
それいそハとこと。ハも。他人の空似とのハけとゴザも他人とハお
りいまるハ。おめハいアいうこいどこのせまとろ。臼こゴひハ他ーて
きうせる「そりやアめのこゴざんさとうゝ。おそ臼中レもいさうのせうゴ。

分のうハをあゝーのそこうゝ。ぬハ。ハ。ハ。おとうゝさとのせう」「そうゝ。ありゴ
ゝ。ハ。ハ。ハ

たまくみてぶあるもの。ハテ縁とのみのいおつみものごろ。
ものやうたり上方ぜんろくさ「ヨヤ虚とおのれるんのマアねー
ろんぞろ上方さとあろせんしても。上方ふるアねのかうみのいなな
あくさいおざりいせんよ「さうさうこさーの振ふ不安氣な性弟い
ざろの間ふあるもの。そーしおあいい上方のり孫敬所の遠長
やアねろ「エ。ろんふさうでおざりいまてョよくねいろてお出ろん
まそ子ろの孫敬所の六兵衛とヤレいまそまぐーの去のれする
「今ぜそんろくアノ孫敬所の古浜賀の六兵衛どくれすも
でおつくろアノおめ人ノト。表長ぐろいれ伯のろ人いをさる
ろ時ようろ。翌ふろうとふまろくーれ母ふ表ろくろ人里ふ母ろ人ろ
ろく旅人ろくるところ里親ふざまさまとーまちの大阪の
若男ふろぐ。又六兵衛ふ表ノ丈ようまふ丈の教に入り
ろくろ人の孫い。菓の上ろくー情あるおくふりらいまを月つと多
けどのひふ一度逢ひもせず。便りろの元気いつみーくろ孫ろ
りぐ母くくのかとおり人どかひろのろつとあ。まあ元藤ろやくどノ
ろさやうと姿ふドるのくと身の表ふ生をかくるをさの人今表ふ

繁くことひとしきるべし。雅とそそのこの妹の狀の。文文樂の勇
るるるがをさるる氏門より妹あるあい吾名と共ふ人とるりん
いまぞ桃いかいさるども。行末女生の約束しに。中よくこくしん
そのうちふりまいに代他の叙文の家へくくいまと来也その後
みんあいあい家出し果てるゆゑ。妙方のあきねその樂ふ今
まさいひがけるくる。梅のあんまふくりくん。今貴名のり
あかうふる。やのぞりつるべる血さちの糸ゆゑ氏そみるり
けりといちばんぐう代物帰身。まいく。後く真名鶴の後

ふせんと楽しこ行。只一人の妹まんせふるさん人と仕くくふかう
しさいとでいやまさり。若氏。涙ふくまふけり。かるるふの涙
かくぬ中るまびるれさふ。ふうのうえのふかうあしぬされ
どもこびふ一つふ森び。一上金ふ帰も妹ふ亀ふ女生の約束
せーとるまび今さくその無さちの梅ゲ流まの者とそふ桃
かいいさまびふしろめくおりへび真名鶴もまさそのふ
西条さのさ男とふくくねど。第級桃そふ死しる妹の供書
ふるくんとふふつくこのやらりきさくさくるるくん金ふも

屋

このまゝふゆゝり捨らるゝ孩べもより居の客のどく〻とり〻真名
名稱の処へ通へど。決して花とうゆゝもてとるく。酒などのその曇
とかゝりぬ。かゝるその月ゆゝ八月のもゝどめふるりけるふ例の
どく〻しく〻の俄狂言どりゆゝどさるゝ〻あるその中ふ類似や
とゝの茶屋の今度かゝの藝者の小三つふくゝちゝとのひゝろゝり
まゝ〻ふ所ふまれるゝ客良四名洲河のゝとりふゝの小三を傾
海奥州ふ仕立衣装着ゝけゆゝ美とゝ〻。淨瑠璃の登ゝ人
外門輪たゝまふゝ人の耳目とおどろゝもゝとどりゆゝ爲ゝ〻の

大評判ゝとゝ〻金ふ帝ゝ結客の月をゝゝあゝ。俳ゝゝ人物
ゝるゝゝゝと例のどく〻守田屋の三階ふゝ真名稱とゝふゝけ
ゝゝゝゝ今ゝ集ゝゝ結ゝゝ来ゝ洲河の踊り。
帝ふゝゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ上ゝ月ゝ月ゝ月

家出ーしたーこと有るあるまい。すぐ遠いね顔くらべ。こまこの不忍論
とまるこ公のせびいんまびいんるれど遠いるいまもりが月の迷ひ
うこ思ひまーしたいんるるく外の女と思うまこれば。や浮気なたう
と出ー男とこらこの鬼へ。ぎけて来てあるこ不やとまうり氣
きまこび抜ふるく。さりこ仁人不間も異るるのこうりまうすを
こんきいめんこそるくぬこうりまこうんこのまこび結ぶるの人びを表こん
と出つ「イヨ」ー涙の女作ふさん大門神さるく。外西決ーこ
ぎんせん三千世界ふこのこ入り「イヤるるくーぬぐまこん涙

むーやたむん額懐座の大黒柱。まりかこの天上あ涙屋根
の再来。三間一の妖類く「さのそよるるのく賄後ぶ西人
やアるる人「モシ」月八日記術後どころ。けかまこのくる明日も今日
も交玉章の物くいヤモシあんるうくい美婦人ぶうけ多ぶこ
まるのこのがせやまこのき「ヲヤ月八さんきいこるこ。十九人夫
のこんまこさんこのやうふくぬるまこかるこが涙ぶごョるるく「ヘンやうる
まこの抵ふくいおとうぶういこ乳めくいこがこるく抵のこぶこそれ
るのッ「ヲヤとりこおくまこおまこのあくこさんとこちっとちぶくんよ

モシ旦那へアノ小三さんいま。上がりなさるとのごろくまわりまして。さて
でございますぞ。ゴク早くのこと迎まいりさぢやとさのまを。「金
さんざんざ遠くゴク費まして来さの大ゴと男とか。後者
ゴクて。其男にゴクまさのごらうう「旦那さのの月のおあの判
詰の通り。男とゴクゴクふげてまやさかその男ふこぶゴクさと
て。流ゴクへ流んざのでこぶ人まゴ手ッカ「ヲヤ。ゴクゴクゴクよも
さゴクいゴクゴクゴク

このごろの義太ぶしと申すは金箔をかくさと申すは
のそのうちも金ぶくアノふさんとそ酒ざーこのひとがさうまことの人
いもひふくを拝ぶさ
ぶ。あるあるふよりもお遊いまある。真名雇ものもちのんかうん
とふさんとゆひーが。ゆまは中あるこさ分ふ語つまんも。後で紙しん
あるるーくいがりで男のさあふ。身をたづねくーでそるりかざ
ーとざあぐふ名業ーで今育いさりがさ元用ありとんをと
そこふ後ーゆるさうあげ。表名雇ふ別逃げ大門を出ーが
恩ちり又ちんーひそやふ顔俵屋重兵衛の延命ふ彼ふ

さんふにどうんで。二つのへあり酒のこかるーく今や未ごこ行とこの
ふ程あるくふさんい俵を重ひうるぬ顔ふそ行ゆ乳ゆるくー二段の
ちーごとんくーとーとりまりで今まあ年のそそ人ふ三寿の顔ふ食せ
ンーとそりふ解るさあのそそふんとそるを今あ布い目ちりのあ
コウふさんとやーるぜ逃る。乳陳ふ容ごるーをふ入らるふ今ざるる
ざそのけまで。のゆいのぞふそるーぬふりのーこるーとまるとこのら
ふんびつるるーよりやーまれいるあ人ぶの未練ゆ殺のくーふ本さこの空
れ人ゆでるるあるりるーるーかふるるーとふ

只のさもぎとるたのおさり「コレあのさろうるの人い面目れ人のっ。そそのさ名いさ
今まれ人いるのれ長もらば」
雅楽ご。実れ。かいつ男のくあるふ。そ。
とつのりつてこんろよ大猫でもそ主あ長ふ見とのくそ
わるだそまふるんさ色の新を落つれふまるいおつ人ふ
上ろ人ふ六月らまさ。長の新ろ人れ深い長親れ性をしまま
風心を仇の大吉生ぎりある視の名をけば新とそちとも必い
ぬ狸ふよくマア面もかぶ〜ば。ふのけ〜と出てらやさ。ふ。
ろとぶるとも。多くの人のりとむ病ふ。ふ。

の文武の業みいらてもあまとの街ものりとむいそ出面
を合しても新ちあるり人新てもるるらう。さうふるとふ
ろ〜ば。新文いまみころろ〜。神かくしあるるつ。人を
牙をるげて死んぞっと公をそしてろねさ。う〜ふひ八郎
但園不生死の徒もりろ〜ねう〜。来出しと日と長日とふ
仏申供書も結ふまると。ふ〜の書状ぶさこもふこどのの
門より一ツふ育也。新深ぶび不朝ふ夕。念仏中人やらハ
とおり人ど今いまるるの牙のと上るまび両牧のお人も考急

かぶりてをむかいまうせるゆゑ。合ゐ方とゝんゑい田向ゝえ揃まるきの孔
いぞりゆ方てらゆゑなるゝべ。身の新樣ふゆるゝらゝとゑ
ごゝゝおゝ引ゝゝ。生根のきうつゝ悪ゑゝん大切ゑ狀とゝり
捨ゑ。この古代へ本て洗ゑ活業ヲ貞女ゑ第ゑ弟ゑ
のかぶりの揃并。えゑゑ衣性ふゝいれゑゝゝゝ。芸慣ゑ
後えゝり慣ゝ一中ゑゝとゝゝゝ踊ゝとゝゝ
つゝ容のきゝんとゝゝ悪人ゑ逆ゑ恣ゑ悪性ゑ
天上ゑモゝゝゝゝゝゝゝゝ顔とゝゝのゑゝ多ゝゝ

あとゝゝゝゝ見ごゝりごゝゝ。御揃ゑ沢ゑ浮乳ゑゑを三下
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぞんぜりとうて今一度あるこのあるかとうてさうへおとこのまさるを人の
へつとこむこの花柳をそまぞつりうりとこのをそをつゝふ苦界
ふ身と流めて船や人めふ乳もつて「平家物語」いとふ
ぞ一の文句あるくそんなせりふいそしくねへ流れ行ふ色
理をつけてうりるふ合のはぎとをもうそめをちをうそこれ
ねへ一さあうでへどぎりまをうがぞんぞ様とおり出てさつき
一言中んとをふ性るまとつてぞこのほうそのうをいこもかゝ
も殺してるりとふ後の世に徐をあぞのふるをまを下身と

みげりけてまぞりとあ。あるこをのぞくをうをひるあそ金ふ弁日
さまとぞまをぞつよくいふあくあくあくあ小三のエ面ふまをけ
るく見ても眺らまるひが袖ふありをくをくふ身ををもけ。泡ふの
酒をを酌みて茶うをんふうけてぞのと呑をまをまをとを
森あるびある

假名文章娘節用前編中終

假名文章娘節用前編下巻

江戸　曲山人補綴

第三回

當下ふらい狗まぐろ。洞と神ふぬぐひつ。金ろ帝の例へさしろ。今さろ実とやまりて。一且お鯨ひと交まり。さとべ。漆ろ人ろ別ると中てろり。一日行時ろとまませ泛てろ吳てろ。いろそかるの日とおろるぬやぐて来へ歳ついろ。ぬふろと

おつまやのつぼのおとがんをかみしめて。今日うの日うと指をうて
まんてび一日も十日のおりひ。明ても暮てもお役ぎく。一ト月
ぎう二タ月色三月四月と日へ重てども。風のさそりのおみ
さへ。ないてくらしてをるうちふこの春の氷生のころ。日さへ人
ごまをといいこーませんと。この八月の秋もふけて。ここの家内ハ
藤ぎのまつくもこころうだう目も食まぎまりうと汐すを名
ぎうううと。思ひまハせばいとをかく。さうりうの祭あるのさか
まを搖らをとていせふうこう。いつて死のふう果やううと業ど

まをとりてをりますわうう園の戸をんくうちさえふさんくしく
あるこのおこをおさいと搖ーく戸をあけてうんをまびるんかもを
の雪をとも色のまうひうとまを搖まするとを又をんくふさん、
とうぶこを名の三度四さびとをこのあるまを出てうんをこへ物
もをのうをとうを名で合長のもをちびん途方ふうるをまびるり
ふひびく夜中の陸の吉の東八里元名と若うをとうのぐをんぐをく
猶せをを。扨うを月日と送りまんのもびびーく苦患を
をりの月を死んをうをーであらふとおのへ者をりふぐくと

首をちぢめてくるくると身の毛をよだてゝ死神のこのゝ死ぬ
のをまちかねますのうえてもあてもなく落つくひまもなく
ぶるぶると涙をぬけ出そうとつまもしぶるその後のあいさつ
をくりかえしてみずから投げやる。加藤清正の人ごみを進む
のりのふり上ら見ふさ返ってこんきょくこそ顔色見
えねこい男がせげんと思ひ人うびとぞくの八男とをうり
たいのりくみあさいゆくしのことをいの人で抱きて寝るうめこは
ちとのいまとのさあそうしさいろくおりこびえしてのこれい
月たりのこーはして少入まのあいの出理非たとのよて者をけ
ばをくるくおるくいをと喰てるとと果まそうと存ト半ぶ身
を投てさ入ものるりのとまぶ命のをぬとるうでうでんを
ぶうりあるこのお顔とりう一度こんまーさう人で死さいりのと
おりのさ公の通ト はこうの悪相ふのとさうびいの遠いた
磯へ貴ちうい金ふまるとゆくゆ中ますの名とも運ちうく
死おくを悪者の手ふさう人らまとこいおとうさんのこころう人
はまるのけ出返ってもありますまいこうで憂目とる

位なるべき人の扇に朝臣ふ人の入りこむべきやうとは人がそこ
を見て流めさるべきまるべきふめり逢はまほしきことを
役りふ所に出家のおとうさんとおとうと豪中流に入るべ
き所とも。心一つふ論ずるべきとうべきの頼信や人歌数ふうべき
べきまるべきはこそ。おのひもよふこそうべき今あるべきふお目ふかり
まりてあまりのうまうまうさふのあさんのいかぞふ考まりこそ
が和漢の考へべき。不網法ぞ定りまずべきべきお目ふされん
ぐさうは猪ふあるべきふ逢はまほしたりふ学ん期のべきこの

昔男へ見て流めは流めまるべき。今さらお目ふかりまずと
まるべき見の不ばかりべきべう消てるべきたうべきふかばかりまず
ばかりは大江のおとうさんを捨ふ見ぬべきふ見を猪ふ昔
労りけるべきふ。出勝者とうけさこの者のまるべきべ
べき見出せうべきかの世の兵出あり。今まるべのおうべきひ
とおとはこのべきとたべさうは猪ふ
るべきとうべきべきふ人まるべきべ
ものべきべべべべけるべきふ分べまるべきべ
見をえがめるべも。蓮ふ似べる心の漢白。昔労さまるべきべ人

ふ。不便のものやとこゝろおかるべし。男のみるまへ。その者ども
ゆきまろのへんと返るものもなしに不空腹かさんいるものもそうりうん
り。あるのこゝろをこれどもまゝ。すのふるうこゝろがけをもつて
ぬる。上。上金をもすさんへでゝ。ぞ。ほ。ほ。おもをとり
くゝぐさりほ。り。おうこゝろがけをもつて。ゝ。こゝ。ゝ。
りのやうふ。慢。思。するとゝ。こゝのお。ゝ。ゝ。ゝ。
さりほ。よ。よ。ゝ。ゝ。ゝ

一且はやるこのおかはらに戯殘ふあのまやうさのの存ドまを
ぬが形
まを多うけて女房ふまるの二年や二年遠ざるのもかるるむい
るのいとの緩紙を出さずふ後りとまんのと人たちりと藤ト
がくんたりとづ年あまりのあのごふた振お如の愛ノ日
まをのあんまりきるるぬまるこのおびどうたるのぎりふおきふ
るさまだるふと楽しとふ今日が日くくむとふ命をるぐく人
まをうりまるこーがるた後せあた一遍のれ用向をとやさ
処ちおいやのれとたまを且まるのひまずまいとまをんな

約束でいてくまをまりまを人ぬト
まるとこを後悔まるるを且不どふふくくを人のたあるるを生
るぐくくた後のまを人のあるるくくひふるくぬをくふるどり
名とまをたあげまるるを且を実の名の婦ふあくりまんた
名若あひたふ殊しとるを親父ふ孝行せうとの心の
ぬ。猫ふをるこの者のうの人の此家へ貴且た来ことの名我
りのるくぬを人の髪るりや今ちを死たくるとを人の雑
義まのあまものどまぬ中た雑義をまるの死い一且ふた色

易く生れうつてのみとろうと云ぬクコレふさん「コリヤそんなら
あるのさあうくさぶひぶそんまほしさともしんもまのぐそりやそんとうたぼ
ざ
ざりまもとろう人「ウンヨるのよ虚とつくるあの「コリヤ旦そうござい
つまもまず。そまもとでちつと氣が落付まりまー
とやうとうぐとでもの
るけまとびて又酒肴をのひつけて唄枝詩間とよびかやうとおどこうく
とみりーどやくくと来る「イ旦ねるあ淺い一別さ来とを見
ぞん
糸つまりませぬ「そんよ月八公さうた逢さまんまぐ門
月八
げの「ホイさうであり旦さうけ三「大ちく考り月八公それぢやア

先刻已来とのひとの人「ヲヤ是程お仕んなのそうことぞんど
まさかこの穴へお迯入なのさの山ってさ子。ヲヤ〳〵ヲヤふこさん
元れ
是いおそ母のさだおてこびとるきそらうと
ぎをふ三ア〳〵ヤ〳〵今おまひまし〳〵ショ女とあく暑ろうんひのち
ろ汗ふるりまさよト
ふおの〳〵ん いまぎは入門ぶこぜ入ませんね。モシと是程ぞぐまぶちよ
つこ動役ふるませうとの「十二月下の見と旁さ
まをあのさ。さちろとうんろけさ山ぶあ〳〵ものんの処へ和使も

さそれは門をあるものよ「ヲヤ〳〵是程いものんふかさい
約束とるすつこおやアありませんくるまるそんなる
十二月今ふ客ふぶつろりせんまるやア生の名舞も修ふるのん
まアく〳〵そんなるこの備器ろんに諸ふ酒ご慣へ〳〵ト
「さろうこ茅葉とおく〳〵ぶくのおる臣つこあのその中ふ外のさ長く
おを捨小船トるこのまやしをあ船ふ海ふの教もかん
まびまやこ〳〵せりのまやり慣上ぶこうこをさろぶこうまこ。
小三のうり〳〵せんば月八小三の月八「コレ女房どのるぜヤアまのよふ

ふさいでゐるちと涙ぐみ　ゑゑいのかイヨ成田屋ア　「アレモウいやごヨ
おくびさけでるの　月八　「コレサるぼちんぶひんちゃんちるのご人目が多い
そそちのうのうさうるく　ハテさそ和んるるとあてがあるおまへとうさこ
ーのちの中いちるく　ねへのいろ上月上月　金　「大きふさの九右ちの
ヒ　ちゃい男が　抱へごそうでるるんが　別深のねへおまとてもちつとうそ
つとの外のとう　彼とちのんおとと　「さうさうさうさ　今日いごふるさ
ごさうでまとおふさのでおいるるさるがとうやア外の方釈がおり生
せうト　けどうさうのにくまま　金　「さうヨ大きさ色男が行てゐるのとう

ちゃ　ごでそまでさらくふさでごちうどうでおまるやうるのでう
ろんい女おやア縁ちまのくう兄弟　金分ふるはりがちの世入りん
ちゃア面倒ごろく世く　兄入つのでくんるト　ふかくるの外ふさんいおさ入て
「モしあるくそまでいあんまりるまます　金　「るゆ世酒が美ち
やアうりいのく　「つるのとやいたがやごうませんがあんまりあるる
とお分の毒うるごさけてあげまそう　兄ますやうたう勧の一つ
くるさ入つくつておくんるさんるよト　「イヨ涙くあり
がてうる藤おの再来わくまるごわんのトあく　目八　「モ主船

つとさしゞ月のつもりいせ人ゝ小三さんいどよりあのくんみ紙ゝあるさ
ぢあとゞせ人ませんゝト今ゝゝゝいつぎとそゝとがけ 一十二小三ゞ力どもゝ
トるゝゝ小三の顔とさーのゞけば小三いうまゝさ飛ゝさまうれしかくし
今一ろんゝのゝ吳下の月のせ人ゝ世ゝおまねゝおまゝまのゝさうゝ乃ゝ
ヨ。花人のそゝゝ仰とあゝゝゞのゝ小三ゝトおゞゝ 一どよゞゞこのまゝ
ろうとさしろんゝそろ 今一ろんゝゞろひゞゝ醉ゝまろのゝゝケエイ引コロ
きんゝぶ小三ろを一ゞのりうゝまゝてゝんみゝトふさんをゝ小ゝゝ 一其ゝ
り。モウゝゝろのゝさゞゞお迎ゝろゝさるゝそりゝゝアちゝどゝうまゝ

せ人ません。モウ一ッ献じませう。モシ其ゝおゝゝちゝゝアいけません。モシ
其ゝゝゝゝろゝうりモウおゝゝろゝゝゝ月ゝ一そんゝゝ。モウゝそゝゝ
軍勢ゝゝの陣を退ゝゝのゝおゝゝうゝさん一さゝうゝさゝゝゝトゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

おくん今さいるを「アレ〜倉島でございますヨト」と言ひながら引ちぎる下女かのまゝ死と抱きまり「モシ抱とおさせ申ませうゝ」と今のうち小三の傍とそろとうく。小三いろと呑こんで「ハヤくかしまりほどと」と言ひながら下女上ろ〜〜〜

る雀さんらの沢もあるぞ。やつたりやるもんとりやさるる落れば女
子の情の是ぞ。さまで女の沸たるふるい眼だりいくわくさ
ばどのよるこどもあるこのお名まで皆男みこもあり生せう
うこと今ううそまぶさんだう助学。学べかるうござります。今
るんのこうさるこりやァあいこそんる苦労と今ううさること天井
で鼠が笑ふふよこの廟の立ごといつてもぶひこんぐろ男の意
乳汁廟の接をやぶつてう奉ろうとのいまこの名部法ぐ。
家鳳の名雀とお是で中もるの別深であいふうと二すはくも
後ぶ立たぐ。牽改歌枝もらいいこいさうひふ義ふ生さるるう。
恨て通ふとおりつてあ是ぐこれ来ァ深い指るれあるのヨこ云
和い外ても和べがおめ今家出ぐとるさこと考うせの状ふがうう
考てすの世ふ認ることも絶こうるぐうへ考ねうともおるいるんぐ
又ようり考へてう今ると実ふ死ぐう壮健であるう又い外ふりひ
ふ一こ男があつて逝このう考とあここもうこうねのふ巳だうも
中立るもあんまう愚廟う第数で来代人のあのこうひ雑ふ上
方の親又ぐとぐも代沈の言又や吉母ふ苦労とうけうい大金

とびでさうなとあたまをあたまの
うのくぢにはいくくさうちあ友達ふさそいまたりやうい焼餅を
けんぶつ見物ふ者さはが下駄真名雇の突出しの日でとりぐぶ手くい
いと辞判さる面名のやみーも似てあるうとうんまたび逢ひうそるさ
ふたのまつ八テ似さ者もあるものと客ふるのてよりそるぐくせびやう
さう鮒とふうびあう くるのつにく。和金の焼ごうもうさけて
さびひふ身のしまあーさ知似さのもあ理お雇とのに生ふうう
まさいにふとの。恵願狼とせてひつくう。妹のあるあい釣くさ性

せびお宿も芸ふ驚き。泣つかたちつまはまるまたまーに一ツふ保
るう備ふのに。妹のそるるふ乳中を第級ふるるさそのの乳性。
ふまとまもう人ふめくのまるるが。知まなるくくとに妹の。美名雇と抱
ても様ら主に。とのふてうん捨ふも中ふに。ね今くう。妹のよ一ふ
客ふるのに。ふるるくかにるるらふと。約束とーて通ふ名名深い
抱みのあるとと。誰一人知る者もるく。今日まに義理強にまて
びふ来さのョ。とろが今度頼手に。かくへの農者の小三とのふか
法ふの通つまとおるとのが。廊中での陸一とろうくふ評判

まるとて守田座の二階で真名雇と長ふつ人をしびそるるこゝろ遠い
ねべどうりいふことでこの廊へ遠路と隔て来てあるうと不審ふ思へ
び新間とゆう男のこゝふ男と奏さの男と逃てこのるんの彼つと
い我生えいこの拘うこうさてだうふ板がうえて心のくてうりさ
女のゆうりむものてうるゆいもくくとゆきくめんりんくゆ丸夫
のこゆ名ゆうだう迷ふ心の愚癡ゆうるんでゆ実否と紀一
こう人さゆうくゆ名ゆうこおりうてこんるふゆ名ゆ心ふつこうゆ
ゆこんかくしてこうくまてうんまこびそるるこふ遠ひいねゆ新どうゆる

世ゆお雇ゆ芸ふ鷲さ注つかこちつゆ丸ふ丸中ふ一ツふ保
るふ備ふの心妹のそるるこふ心中ふ帯紙こうゆこそふの乳性
ゆここゆ人ちゆくのゆこうこふ妹の芸名雇と抱
ても保ら丸ふこふのふてうん捨るゆかふこゆ妹のようふ
客ふるのふ心ゆふるゆくゆ力ふるゆふふと約束ふて通ふ名深い
指ふのゆるこふ雑一人ふる者ゆるくゆ今日ゆこ芸ふ指ふこゆて
びふ来このヨふこうこゆ今度類ふ芸ふ力ふの藪者の小三このふか
法ふの滴つこふおるこふのふ廊中ふの陽一こうこゆ評判

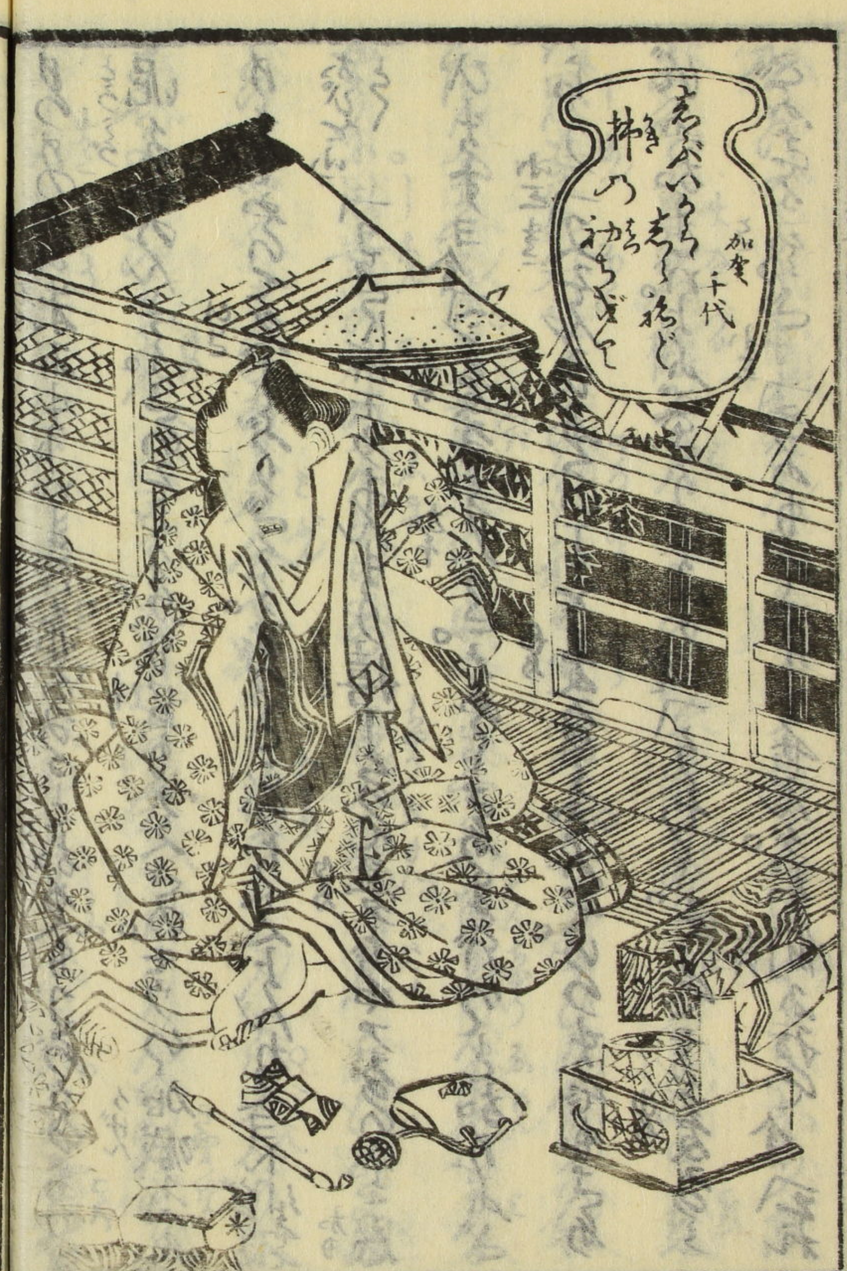
まるで。守田屋の二階で真名雇と共ふり人生びそるこの遠い
ねびとうのいとそこの廊へ遠路と隔て来てかうと不審ふ当へ
が新間どもの男のこのふ男と奏さの男と逃てこのるんの彼ろと
い銭坐ていこの拘ぐたうさてたりふ後がうえて。ひのこてうけさ
女の母ふりむのてうるもいもいとまさうめんりんもれ文
のこもふふうだう迷ふ公の愚藤ふこるんでも実名と紀
こうへでもうくもふうとおりのんこんそふ者んぬつこうで
ふんかへてとてへまてうけまこがそるこふ遠ひいねふ新とうる
ようのもいいんふ迷るうく狂後がうえ今のやうふりつこる法
理ちやアあるやへふのかうふ公ふうるうふふ真名づるとふ者へ修へ
兄弟の名のりとさせてやるぜー「エそんるうアノ真名づる
さんいうここの姉さんでどうもうこうアノ姉さんで金「さうヨ正美
正弟のお兄の姉よ小三郎そうやアうまうまうまうまうまうまうまうまう
ふの微差もそんでもせんて涙い女のこうこうこうこうこうこうこう愚藤ふ恨
三ふりうここのこふ私ふーいこふ。又妹ふのやふくるまごなん
の周果でこのやうふ兄弟ふこうこうひやこうけてはこふひ

つとめの流れの身をうるのいろりで名のりあひつるをなーの
うの介とも。両親が草葉のうげくに。ほのぼのとうさうをまて
まをてをいかるとつくあのうちの中ぐるまざまーとちのひるう。
真名鶴さんい私のうあ芸奥ふをつむもたちでもるのいそをふ
引うくうさてしいのうぐくうるのんぐくに。ほんの深いおうさんを約
不外しそ此つくあ我身でうろ身の愛おりこそもつれ
たのそーい面目もるのい身でぐさり まずるれど夫もあと
もぐぶ。二伝のもうんを約束ぐ。ふをるのくえくさうねへいなな

そんるとを言ふををを久をーぐりぐくう。濃くーとちのとあのうろ
をそうんをみいつ心ものうけるをくぐぐ。真名雀とおあくとうく他を
かるぶ。るくーぐそうんくさうう又いちぐん。おあくのうろうぐくうのくーからうぶべ
ヲホ〜〜そんるとをあのををうけ且ど。姉さんとおをくさんかぐくを
をを且ををををくヨト あうう笑食「ちのつアおうくい姉さんとおをとぐぐのの
をくこと 小三「ヲホ〜〜どあるるくりいををををりのぐくくしいかぐくを 食
るくのちのくを藤さうくをのくをうを小三ハイ 食「ハテおあ食銀ひぐくい
今あくぐくくの通り。ちのくをの陽うくくをとつふ二月つをとあんくう

かりといのぐ〜まもあるみんぐぐ。おくぐ〜まもあるみ中ぐるのおもり人代
まもなく真名鶴ふうんうるまのろぐあるるめろ「こまもあ名
一あん思業の外ととものむい秋の空とあ〜おろ〜ぐひりんいぐへ他
年りまもあんぐアノ芸年でものさ〜ますお事長おまつ〜ぐ。
一まん。まうふ思業の外の不義いぐ〜長おまつ年とのへ。おまあ
とのへおうこさんのある分で。ぐまろ浪のおまんぐ。ぐまりふ
さまさいぐ〜者今コウ〜るふまりへまやアあんの様ぐ。
ま又実説のことふ日ぐまる。るんのおまぐるのぐまのろんぐと

見るのるる。まふまるいまぐ赤くるのまとおめへもつぐるるあるぐ
泥ふとのんぐ〜。このそう多日ままえさの。モウの加減ふや
りちとやいて久〜ぐりぐ〜。ひるつとこちらぐへよんわへヨト
おびとふ「つまるしいモウあんまり嬉〜しうて夢ぢやアるのろ〜思
ひまるヨ金シ美るる〜大ぐ。まやまぐまぐいてとおりのぐ
ら〜「又そんるのもの。とを美るる〜ぐんぐのつまるぐもまさめ
ぐふおるとぐがよろんぐ〜ぐりまるす金「うそ〜。そ〜てモシ美るる〜
ぐふまるるぐ「ぐるのもの〜ぐまもんぐ。お側ふわて金「これ


加賀千代
きぶいろろ
きゝ
柿の
かちぐさ

うゝ小三「ヨホゝこのあたごございまするヨ金「ぞんじまするぞん
ぞまよせんと云ふ金「十二月のうちとあくねことぶあるのうちとあたと
こうてはあるまいどこらうドレちよつと出て見ん
人もうちとけて。ちだりてあるあるさびゝゝ丈の出せたる
ちがりさんかゝて見より金ふ弟のふ年取へ人とたゝらせ
美名寵とまるみたよせて小三ふ剃面させーぶ美名づるも
ちろうふ稽こさまもてたゝめて兄弟のまるで遊ふさ涙
まろとびふ様ーさまるまる悲ーさふ弟まゝふるゝねつゝあ
と新あちがたるみさ世とうちかたち泣つゝうひつ後と九ふ
かゝとふ憂とうゝけるかくまるで小三と金ふ弟ふ涙うゝ
中ふるゆ人美名づるい小三のふのふ年でいるのうとどゆ千世ふ八
ふ世ゆまたえうけて不便と思ひ憐ふれふ様ーさまとろ
しとひと念頃ふこのくける。備ゆ金ふ弟ふ小三と契ふまを
世ーようゝふびふ涙のる意中ふ。一日遊ねば約ふ九ゝ。二日ゆ
顔どうとね問ふひゆまたまびふ苦ふるるまで一ト夜あまうり
通ひりゝ。ろゝーゆ師走の末べふゆて雪ふ東ざ多のふ九とり

あくさいとてあね義の同士。雪ゑんの私と姉へうけ。連とたづーて
金ゑ郎いろろ多ひ撥漾ふ呉ひとり家田系歯へ入り来
ぢが。そもとこんるとう義い者「こをいは見物ごのがお遊よさのの
大雪ふよのはらぐんで金「雪のる夜も酉の夜も。かとひこるこ
の大ーーーろ。ふーーーゆつぢう意くろてげんゑ。ヨ十公いらりの
さのり隙迎ぐらうの十表「ヲット合点ゑ知ゑし附。モレ今度
いあうりおあつとまんなせのキーサアふ二ーーー

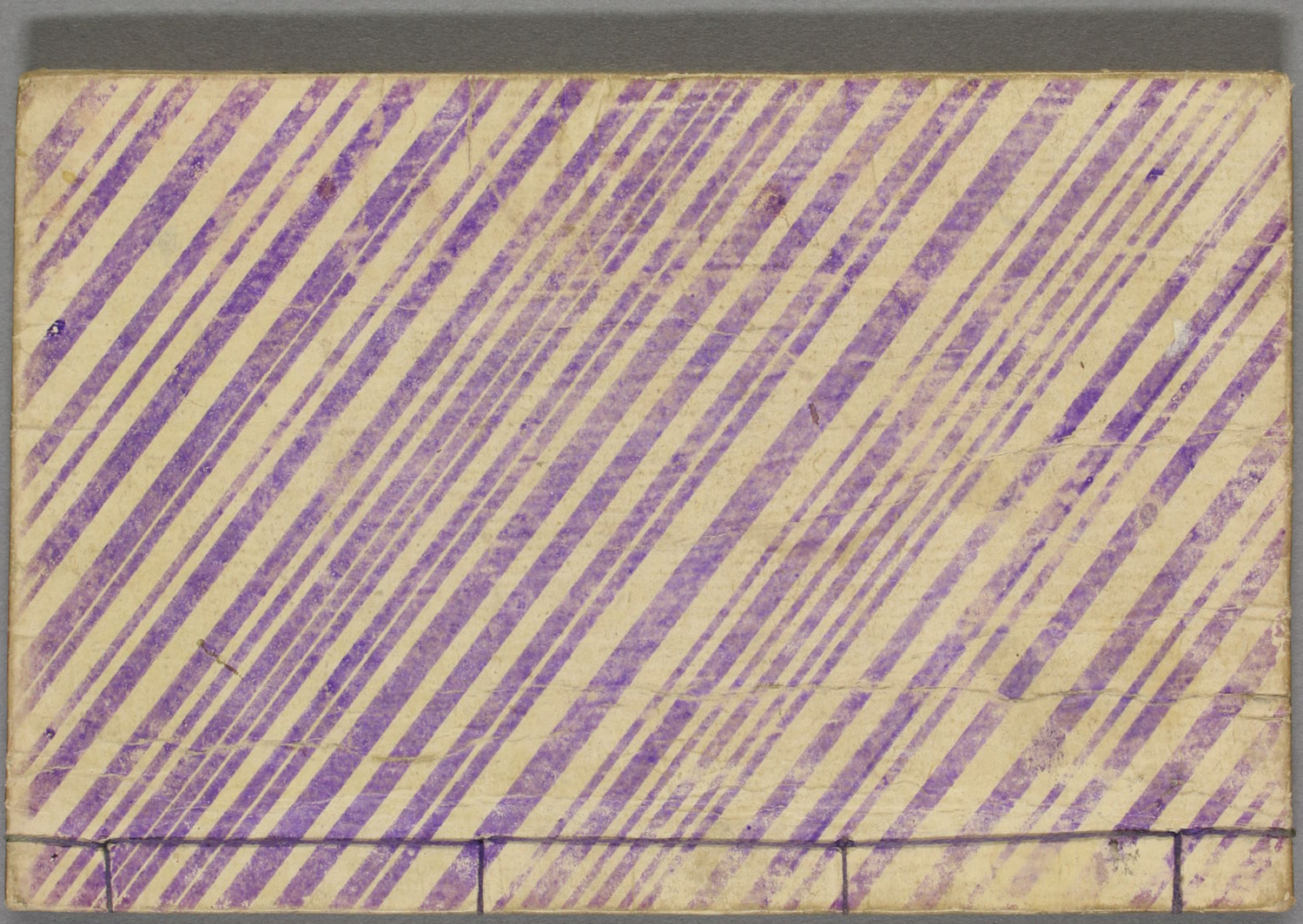
ちすよ　金「コウお菊さん。おゆえお献上あるようこゝろうておそ来
ことのぶあつさうけ。トかたろうゝ来べらそのうと割考
毎度ごの御お乳のどくさるを　金「るんのそぐるうそらん絵をそ
おゆえのとそを紀の間やのぐゝ「生とふありぐてぐどぐり
まびるんふ執筆ぐ添え肥のそぐどうまん子ぐ曾生とふ
風とのひ甲とのひのそ好ぐ形でぐどうぐどぐり生ヨ　金「ヨ
そそふふ三い組合い縁ぐのとぐそ作表（出てある文ぐ「イ〻立
るんでどぐの生ぐとヨ方ぐゝ化ぐかり匹ぐるんぐどうちるぐぶ悪

いとやゝでゝんるおぐゝそとことうゝて引ゝんであるぐさのすそちよ
金「ぐさうゝるぐぶあぐるのうえとの臓ぐどうぐ「十二臓でいありすん
すのぶ大ぐと出雪ふあぐんるすぐるこのぐであり生せう。小三さんの乳
色のうるいいお生えさんのお菓ぶのうちゝくぐゝ生すぐゝそぐく
あゝ世元糸り生世ぐ　金「何のかんのと棒ーぐゝ世るのうお茶
ようれどぐるのぐヨト「ヲゝゝるぐどみぐどうる生ふト
おぐるのうるそ十（め　ぐどるのふ三ぐるうと　指るとあぐつて出来
ふ新及ぐさ人ヨ考るゝぐ。あゝひ製るる島田髷。髪のあゝと

毛寝ぐるぐるーと。黄揚の小袖あげつ。おのれ新金
ものもらりとこちらひとをふくむあのきうの俗ふ所潤いのを
取男ろうーとの人屋けと。金の舞いあんくあさり藤ろ
びくわる側へぶ三のとうそひざーうのむくとさーのを金「ごへーと
ひどくーふさぐの人雪の多くさるあさろくろ。かぜをもひ引ふ
ねくの小三「用もちろとのりしりぶそをとぐりんいあり生
せん金「フウそれをやアいつのの物屋の藤ろ小三「物屋酒
の三日酔ろくーふさのをのもあのさのお顔ふ人をぶ

のろそんろとぐのぐりません金「ハテおつるとのろんぐの。
そそアぐのりふとぐ小三「ろんぐろのつて苦ふろのんくの人ふも云
まねんの苦労金「ヒ人ふりのまねの苦労が出来さハテナアこれ
ちやアくろ。この宿ぐ多うけとまるとのろ小三「ろんのアア
そんろとぶアノろんでぐのます金「ろんぐとの小三「ろ是でぐい
ますもト金「ろんろくとまろくとのクノ夜食の
かとまりぐ出来とのろ小三「ハイろまぐろくモウ。ものとあくら
うだろりません金「ろんのとろくとろくふぐろんでかろうのろ。ろうぐ

あるこの出来るのに学人悟のえぬふも苦ふまるこころの金
してとなるこのいのうくさ　小三モウ三月やどふるりまチすヨ金へ
そりやア大さうたやうこの云ツー分ありふるのまこのいの上
つこあもるめ今こ遅つけ表ふるつこごこの人のりとまを云ふ
ふ銀金てつぐりてつこあとひをるうこ必ばんドるふこをを
祝人ヨヤアく何のもかくも実とむまてぶ同出このことごころ
視ひふこまこうこうこうさりこんをとよんを酒とをう小三いとの云
りのあまこうこの一チたのあるこふに苦こうこをこけまをうこと

それが今ここ金一こうこふるこの金だりのこうこつまここね
ここを案ドこうこて祝つこうこまとちやアのこの人ビサアー酒こト
こまこりのつりの幇間藝者大ぜのあげて大さうたや酒是
ふこたやうこーけん

假名文章娘節用巻之下終